単独飼育から複数飼育への変化がライオンの行動や性格とホルモン動態に及ぼす影響

○鈴木　由紀子，有馬　一
（よこはま動物園）

一般的に，ライオン（*Panthera leo*）は群れを作る種であるが，動物園におけるライオンの飼育環境は，獣舎の関係や繁殖制限などの様々な理由により単独飼育の個体が多く存在する．これはアニマルウェルフェアの観点からは適切な状況ではないと考える．

当園の No.5：雌（2012 年 9 月 16 日 UWEC 生まれ）は約 4 年間，No.4：雄（2007 年 11 月 3 日広島市安佐動物公園生まれ）は約 5 年間，繁殖制限により単独で飼育をしていた．一方で，2019 年より繁殖に向け，No.4：雄と No.5：雌の同居を開始した．本稿では，単独飼育から複数飼育への飼育環境の変化がライオンの行動や性格とホルモン動態に及ぼした影響を報告する．

影響の評価は，①観察②トレーニング③ホルモン動態の変化（2019 年 10 月 1 日から糞中性ホルモンエストラジオール(E2)測定実施）に着目して検討を行った．結果，①観察において，単独飼育時では神経質で落ち着きがなかったが，同居後は積極的かつ物怖じしない性格へと変化した．②採血のためのトレーニングにおいて，単独飼育時では，109 回実施しても成功しなかった工程が，同居をした状態だと 6 回で成功した．③ホルモン動態において，単独飼育時では E2 動態の変動は確認出来なかったが，同居（2019 年 12 月 24 日）以降変動があり，2 週間に 1 度の定期的な E2 の上昇が確認できた．このことから，同居によって発情回帰したと考えられる．

これらの観察，トレーニング及びホルモン動態の結果から，複数頭になり本来の生態に近付いたことが No.5： 雌のアニマルウェルフェアの向上に繋がり，行動や性格，ホルモン動態に変化が起こったと考えられる．このことは，これからの動物園における飼育動物のアニマルウェルフェアを考える上で重要な視点であると考える．